

家族同時内観療法の有効性に関する調査
～ 第 2 報、軽症から重症の思春期症 60 例についての予備調査結果～

奥村弓恵、長浦千穂子、千葉信行、太田秀造、太田耕平
医療法人耕仁会札幌太田病院 内観療法課

1. はじめに

当院では、軽症から重症の様々な思春期症例の対応をしている。非行や自殺企図、暴力など、重症例には家族の同意を得て、種々の工夫をしている。そして、病棟内内観療法修了後に家族同時内観療法(以下本法と略す)を実施し、本法での気付きの相互確認、家族関係の回復を目標としている。前回、本学会にて本法の重要性を報告した(第 1 報)。前回調査した 10 歳代(29 例)に、今回平成 20 年度 10 歳代(31 例)を加え、思春期症における本法の有効性(第 2 報)を報告、検討する。

2. 当院の本法のシステム化

病棟内内観療法導入時、家族にも記録内観を説明し協力を求めている。修了後に本法を実施し、内観での気付き、謝罪と感謝の気持ちを伝え合い、手をつなく、腕を組むなどのスキンシップを行なう。家族全体の相互理解、信頼関係回復の機会を目的としている。思春期症の場合、家族関係の崩壊、希薄、不信などの要因が多々見られる。当院では、家族全員の協力を促し、本法で気付いたことを各々レポートで提出してもらおう。実施内容は独自のフォーマットを用い、家族相互のお礼・お詫びの言語・文章化、参加態度、情動体験、問題点や今後の課題、などについてファイルに記録、保管している。これらのシステム化により、内観者・家族への関わり方の評価、反省が可能となり、治療効果を高めている。

3. 調査方法

対象は、平成 19 年度調査症例の 10 歳代 29 例に加えて、平成 20 年 4 月～平成 21 年 3 月までの 10 歳代 31 例を加えた 60 例。患者属性(性別、年齢、疾患、家族構成)、本法の受療家族続柄、情動体験の有無などを「家族内観記録」を基に調査した。また、前回の調査方法に従い、退院後の生活状況などを電話で聞き取り、本法満足度、入院時と退院後の症状・生活状況評価尺度(DSM - - GAF)、サブスケール表より、対人関係評価尺度(GARF)、社会的状況評価尺度(SOFAS)を用いて数値化した。

4. 結果

全体群 60 例の聞き取り調査賛否結果、調査対象 46 例の家族構成、本法満足度、症状・生活状況(GAF)、対人関係(GARF)、社会的状況(SOFAS)評価平均を算出した。片親群(15 例)と両親健在群(31 例)では、入院時の対人関係(GARF)、社会的状況(SOFAS)評価平均において有意な差が認められた。本法参加家族の参加人数の比較では、退院後の各評価平均において、各々有意な差が認められた。

図 1 聞き取り調査賛否結果

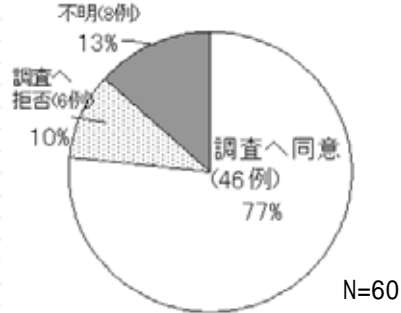


図 2 患者の家族構成内訳

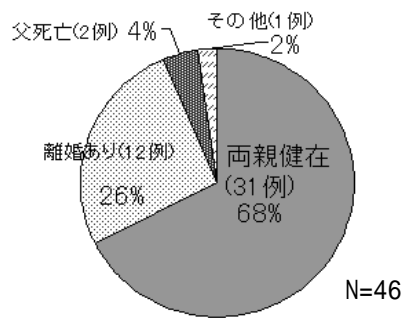


図 3 本法に対する満足度平均値

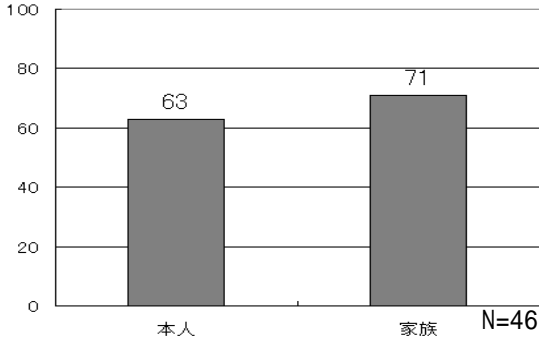


図 4 入院時と退院後の各評価平均値

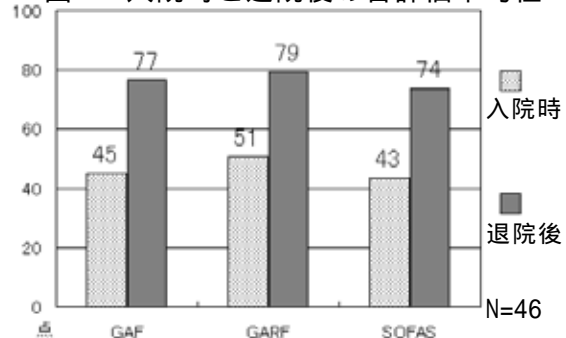


図 5 家族構成別

入院時の各評価平均値

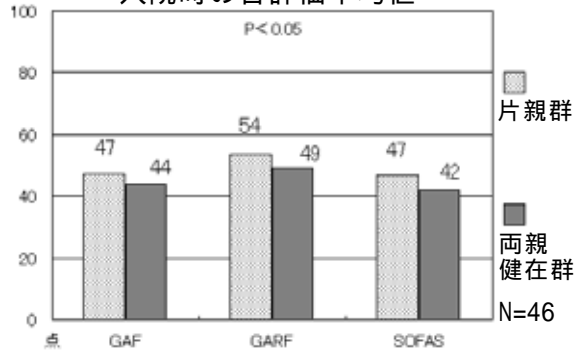
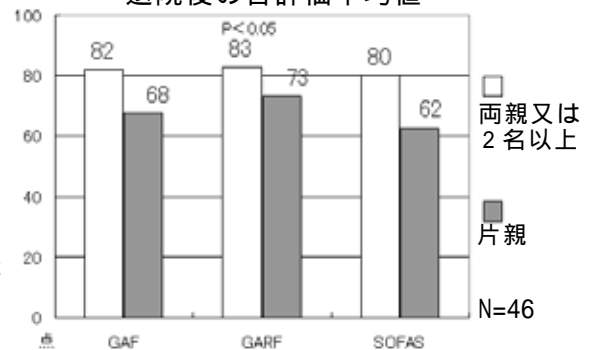


図 6 本法参加家族の人数別

退院後の各評価平均値



5. 考察

両親健在群より片親群の方が、入院時の対人関係(GARF)及び、社会的状況(SOFAS)評価の各平均点が有意に高かった。両親健在群は、片親群に比べて子の甘え、わがママが著しく、父母の機能不全が子の症状をより重篤化させていると考える。本法参加家族の人数を比べ、片親1名より両親2名以上の参加の方が、各評価平均が高かった。家族全体の治療参加が、相互理解や信頼関係の回復を高め、退院後の再発予防に有効であると考えられる。家族から「互いの気持ちが確かめられた」「夫婦関係が改善した」などの感想が得られた。一方、「子供が効果がないと言ったから、家族としても効果はなかったと思う」の感想もみられた。親の疾病への理解不足、子への共依存、養育責任の低さなどが窺えた。

今回の結果から、改めて重症例への本法の有効性を再認し得た。父母が未熟な家庭では、子の問題を家庭で解決できず、不登校 ひきこもり 家庭内暴力など症状が進行し、家族全体の病理に陥りやすい。今後は、当法人内観センター・クリニックでの模擬内観、子育てサロンなどを開催し、親への養育支援や家族調整、上記症状の予防や早期解決など、地域医療に努めたい。